

# 『ベーオウルフ』におけるアングロ・サクソン

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

61

(発行年 / Year)

2013-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008793>

---

---

# 『ベオーウルフ』におけるアングロ・サクソン

法政大学キャリアデザイン学部 教授 岩谷 道夫

---

---

## 1.

『ベオーウルフ』 *Beowulf* は、3000行以上からなる、古期英語で書かれた最大の古期英語詩である<sup>(1)</sup>。『ベオーウルフ』が、厳密に叙事詩であるか否かについては、諸家の見解が分かれているが、いずれにしても、最大の古期英語詩であることは事実である。また、その成立時期については、8世紀前半成立説が定説であったが、7世紀説から11世紀説まで、様々な見解があり、成立時期が確定されているわけではない<sup>(2)</sup>。

『ベオーウルフ』は、二つの物語からなっている。まず、最初の物語は、イエータス Geatas という国の英雄ベオーウルフが、友邦国家のデネ Dene の要請を受け、デネにおける緊急事態を救うべく海を越えて来訪し、首尾よく問題を解決し、故国に戻る物語である。もう一つは、ベオーウルフがその数十年後国王となり、今度は自国の危機に際し、自らその危機を克服するために力を尽くすが、深手を負ってついに斃れるという物語である。いずれの場合も、国家を揺るがす危機は、怪獣によって生じている。怪獣は、前者においてはグレンデルとその母親であり、後者では、名付けられていないが、龍と記されている。

『ベオーウルフ』の舞台となっているのは、最初の物語ではデネであり、今日のデンマークである。また、後半の物語では、ベオーウルフの故国イエータスであり、それは、西暦6世紀に、スカンジナビア半島に存在していたと考えられる、実在の国家である<sup>(3)</sup>。『ベオーウルフ』で登場する主人公のベ-

## 44 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

オウルフは、架空の人物であり、またベーオウルフが戦う怪獣も、勿論架空の存在であるが、舞台となっているデネもイエーアタスも、実在の国家である。デネとイエーアタスは、互いに友邦国家であるが、具体的な敵国として、デネの場合は、フランク、フレーザン（フリージア）、イエーアタスの場合は、スウェーオン（スウェーデン）、フランク、フレーザン等の国家が挙げられている。特に、デネとイエーアタスの共通の敵国として、フランクとフレーザンは、『ベーオウルフ』に何度か言及され、当時の北ヨーロッパの国際関係を反映しているものと考えられる。

「当時」と述べたのは、具体的には、6世紀の前半である。ベーオウルフは、イエーアタスの国王ヒエラーク Higelac の甥であった。イエーアタスの国王ヒエラークとデネの国王フロースガール Frosgal の親しい関係を通じて、ヒエラークの甥のベーオウルフが、デネの危機を救うべく、重要な任務を担ったのであった。ところで、ヒエラークは、フランク王国のトゥールのグレゴリウスの『歴史』の中で、実在の国王として言及され、西暦521年前後に、北海沿岸地域に上陸し、フランク王国の領土に侵入したことが記されている<sup>(4)</sup>。実際には当時フランク王国の領土は、内陸側であり、北海沿岸には達しておらず、北海沿岸はフリージアの領土であった。ヒエラークは、フランクとフリージアの連合軍に撃退され、そこで討ち死にするのである。フリージアとフランクの関係は、例えば9世紀のはじめの、フランク王国国王シャルルマーニュのフリージア遠征に見られるように、決して良好なものではなかった。しかしながら、少なくとも6世紀の前半には、一時的に友好的なものであったことは確かである。おそらくは、6世紀の前半には、フリージア、フランクのいずれにとっても、デネの進出は脅威であったと思われ、その共通認識が、デネの友邦国家イエーアタスに対しても存在し、それが両国の連合軍の成立に至ったのであろう。6世紀前半は、すでにデネは、バルト海沿岸の島々からユトランド半島に移住し、フランクとフリージアの国境近くまで進出していたからである。

イエーアタスの国王ヒエラークのフランク王国への遠征とその悲劇的結末は、『ベーオウルフ』の中で、何度か著者の語りの中で触れられている。しかしながら、『ベーオウルフ』の物語自体の中では、後半の物語でベーオウルフ

が国王になるまでは、ヒエラークは生存していて、それゆえ前半の物語でヒエラークは、ベアオウルフに友邦国家デネの救済を託したのであった。またベアオウルフは、首尾よくその使命を終え、デネから故国イエアタスに帰り、国王ヒエラークに祝福とねぎらいを受ける。その前半の物語の時系列的な流れの中で、確かにヒエラークは生存しているのであるが、しかしながら、まだヒエラークが存命である前半の物語のところどころで、後のヒエラークのフランク遠征とその悲劇が、暗示的に言及されている。そして、そのヒエラークのフランク遠征が、トゥールのグレゴリウスの『歴史』を通して、西暦521年前後と考えられるので、少なくともイエアタスにおけるヒエラークの治世、つまり『ベアオウルフ』の前半の物語の時代が、6世紀前半、だいたい西暦500年から521年の間と推定し得るのである。

ところで、『ベアオウルフ』は、古期英語で書かれた詩ではあるが、イングランドについて、あるいはアングロ・サクソンについて、全く触れられていない。その理由は何であろうか。それに関して筆者は、『ベアオウルフ』の中の挿話の一つ「フィン王の挿話」において、クレーバーの主張する Danification という観点の重要性を指摘したことがある<sup>(5)</sup>。クレーバーの言う Danification とは、『ベアオウルフ』の「フィン王の挿話」は、もともと大陸の北海沿岸のゲルマン人の間で創られたが、それがフリースラントを経てイングランドにもたらされる過程で様々な改変がなされ、物語の観点がデネを中心とするものに改変されたとする主張であった。『ベアオウルフ』の「フィン王の挿話」において、クレーバーの言う Danification が、大変重要な意味を持っていることは事実である。ただ、『ベアオウルフ』における Danification によって、その理由のすべてが説明可能であるとは言えない。本稿では、『ベアオウルフ』に、イングランドとアングロ・サクソンが触れられていない理由を、Danification を含め、様々な角度から考えてみることにしたい。

## 2.

『ベアオウルフ』は、古期英語で書かれた長編詩である。しかし、イングランドやアングロ・サクソンについては言及されていない。それは、その舞台がデネとイエアタスであれば、特に不自然ではないと言えるであろう。西暦

## 46 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

500年～521年ころと言えば、ブリテン島にアングル、サクソン、ジュート、フリージアンが移住して50年以上たち、それらの人々の居住地域からアングロ・サクソン七王国が、次第に現われ始めようとしていた頃である。『ベオウルフ』の記述によれば、デネの国王フロースガールが、イエアタスの国王ヒエラークに依頼し、ヒエラークの甥ベオウルフが、怪獣グレンデルとその母親を退治する。ブリテン島に渡ったゲルマン人諸部族のうち、アングルは、故地である今日のドイツのシュレースヴィヒとその近傍には、少数しか居住していなかった。アングルは、その大部分がブリテン島に移住し、ノーサンブリア王国、マーシア王国、東アングリア王国を造る。一方、サクソンは、ブリテン島に移住した人々と、今日のドイツのニーダーザクセンに留まる人々に分かれ、それぞれ相半ばしたものと思われる。サクソンのうち、ブリテン島に移住した半数は、エセックス、サセックス、ウェセックスの諸王国を造っていた。また、ジュートは、すでにユトランド半島北部を離れ、西方のフリージア王国に身を寄せていたが、やがてヘンジエスト Hengest を中心に449年にブリテン島に渡り、ケント王国を造る。ベータや『アングロ・サクソン年代記』に記されているジュートの代表 Hengest の渡来であり、それは『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」の出来事の直後でもある。ケント王国は、その後フランク王国と関係を深めてゆく。北ドイツに残ったサクソンの西には、北海沿岸にフリージアンの国家があり、その南には、496年にクローヴィスが開いたメロヴィング王朝のフランク王国があった。他に、フランク王国の東に強大なテューリッゲン王国、フランク王国の南に『ニーベルンゲンの歌』のブルグンド王国、その東にアレマンネン王国、イタリアには東ゴート王国、スペインには西ゴート王国とスエビー王国、また、スカンジナビアのイエアタスの北方には、広大な領土を持つスウェーデンがあった。文献には現われていないが、ノルウェーも王国になっていたであろう。『ベオウルフ』に現われているのは、デネとイエアタスの他に、次のような国家あるいは部族であった。

フレーザン（フリージア）、エーオタン（ジュート）、フランカン（フランク）、フーガス（フランクの一派）、ヘトワレ（カスアーリイ）、イフサス（ゲピート）、スウェーオン（スウェーデン）、ヴァンダル<sup>(6)</sup>、ウエルヴィ

ンガス、ブロンディングス、ヘアゾベアルダン、等。

デネとイェアタスの間には深い友好関係があったが、その二国とその他の国々との間は、ほとんど対立的な関係であった。西暦500年頃のデネとイェアタスをとりまく諸国家は以上のようなものであった。

ブリテン島に渡り、イングランドを造ったゲルマン人諸部族のうち、前述のように、ジュートは、大陸のフリージアンと深い関係にあった。Hengest が登場する古期英語詩『フィンズブルフの戦』は、フレーザンの国王の城館、フィンズブルフにおけるフレーザンとデネの間に生じた戦いであるが、その戦いの発端になったのは、フレーザンのもとに寄宿しているジュートによるデネへの攻撃である<sup>(7)</sup>。ブリテン島に渡ってからのジュートは、フランクとの関係を深めるが<sup>(8)</sup>、もともと大陸ではフリージアンとの関係が深かった。『ベアオウルフ』の時代の6世紀前半も、ブリテン島のケント王国のジュートと大陸のフレーザンは、良好な関係が続いていたと思われる。

また、アングルは、今日のユトランド半島のシュレースヴィヒにいた時に、ある時点、おそらく西暦2世紀の初め頃に、二つのグループに分かれる。中心的な部分は、4世紀までユトランド半島に居住し、例えば国王オッフアのもとで、アングル王国を形成していた。それは、タキトゥスの『ゲルマーニア』に言及されている、古くからのアングリーを中心とした地域である<sup>(9)</sup>。古期英語最古の詩『ウィードシース』や、『ベアオウルフ』の「オッフア王の挿話」に見られるオッフアは、大陸のユトランドにいた頃の4世紀のアングル王国の国王オッフアであると考えられている。また、南に移住した、もう一つのアングルは、2世紀のプトレマイオスの『地理誌』に言及されているが<sup>(10)</sup>、やがてワリーニーとともに、テューリンゲン王国の建国に参画する。8世紀の『テューリンゲン部族法典』<sup>(11)</sup>に言及されているアングルである。いずれのアングルも、『ベアオウルフ』の時代の6世紀の初め頃の大陸においては、往時の勢力は全く持っていなかった。

サクソンについては、どうだったであろうか。サクソンは、タキトゥスの『ゲルマーニア』には言及されていない。しかし、タキトゥスの少し後のプトレマイオスの『地理誌』には、言及されている<sup>(12)</sup>。したがって、サクソンの成立は、

## 48 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

『ゲルマーニア』と『地理誌』の書かれた間の時期、具体的には、2世紀の初め頃であったと考えられ得る。サクソンは、『ゲルマーニア』に言及されている、二つのゲルマン人部族、すなわち、レウディーグニーとカウキーが合体したものと考えられている。その二つの部族が合体して成立したサクソンは、やがて再び二つに分かれることになる。一つは、ブリテン島に移住したグループであり、もう一つは大陸に留まったグループである。正確にはわからないが、サクソンのその2つのグループは、人数的に相半ばしていたものと思われる。その半数がブリテン島に渡り、三つのサクソン王国を建国するが、実際にブリテン島に渡ったのは、カウキーを主体とした、西の地域のサクソンであったものと推測される<sup>(13)</sup>。なぜならば、アングロ・サクソンを構成することになったゲルマン人諸部族の中で、やがてイングランドを統一するサクソン人国家のウエセックスのアルフレッド大王の精神は、タキトウスの『ゲルマーニア』の中のカウキーについての記述を彷彿させるからである。サクソンは、二つに分かれたが、その後も相互の関係は、良好なものであった<sup>(14)</sup>。

大陸に残ったサクソンの領土は、ユトランド半島の南から、北海沿岸にわたる、今日のドイツのニーダーザクセン州とほぼ重なる領域を占めていた。西暦6世紀の初め頃、大陸のサクソンの北東には、ユトランド半島のデネがあり、西には今日のオランダのあるところに、北海沿岸のフレーザンがあった。デネにとっては、北海沿岸とその南の地域では、フレーザン、フランカンが主な敵国であったが、サクソンも敵国であったと思われる。なぜならば、サクソンがデネの友邦国家だったのであれば、『ベーオウルフ』の中で、サクソンについて、その友邦国家としての存在が強調されていたと考えられるからである。『ベーオウルフ』の audience は、イングランド、とりわけデーン・ロー地域におけるアングロ・サクソン人とデーン人である。『ベーオウルフ』が書かれた重要な目的の一つは、アングロ・サクソン人とデーン人の融和であった<sup>(15)</sup>。その両民族にとって、友邦国家サクソンの存在は、融和の象徴とも言えるはずの存在だったのであろう。しかし、『ベーオウルフ』には、サクソンについての言及は見出されない。それは、サクソンが、『ベーオウルフ』の時代の6世紀初めには、デネの敵国であったためと推測され得る。『ベーオウルフ』には、当時サクソンがあったと思われる地域には、ヘアゾベアルダンという国家が言

及されている<sup>(16)</sup>。その国家は、『ウィードシース』にも記されている。『ウィードシース』に記されている国家は、東ゴート王国をはじめ、ゲルマン人諸部族国家が中心であるが、インド、モンゴル、他、すべて実在の国家である。ヘアゾベアルダン、は、『ウィードシース』と『ベオウルフ』以外には知られていないが、実在した国家であった考えられる。また、『ウィードシース』には、サクソンとヘアゾベアルダンが、それぞれ別個な国家として記載されているので、ヘアゾベアルダンが、サクソンの別名で記載されているのではない。確かに、ユトランド半島の南方には、6世紀の初めに、ヘアゾベアルダンという国家があったのである。また、サクソンも、おそらくヘアゾベアルダンの西に存在していた。従って、『ベオウルフ』は、そのサクソンについて、意図的に触れていないのである。

### 3.

次に、クレーバーの Danification について、確認してみたい。クレーバーは、自身が編纂した『フィンズブルフの戦』の Introduction で、次のように述べている<sup>(17)</sup>。

It is commonly supposed that the Finn tale originated among the Ingvaemonic (North Sea) peoples and was carried from Friesland both to Upper Germany (as far as the Lake of Constance) and to the new home of the Anglo-Saxons. If so, the surprisingly thorough Danification of the story in England must have occasioned alterations of considerable importance.

上の文章で、クレーバーは、『フィンズブルフの戦』の物語が、イングランドに伝えられた時、数次の大幅な変更、脚色があったと述べ、それを Danification という言葉によって表わしている。Danification とは、デー化、デンマーク化というような意味であろうと思われるが、その言葉が、どの程度の内容を包摂しているかについては、綿密な検証が必要であるにしても、大陸で創られたフィン王に関する物語が、フリージアンのスリースランドから、高

## 50 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

地ドイツとイングランドに伝えられる過程で、とりわけイングランドで、重要な内容の変更があったという見解であり、それは注目すべき指摘であると思われる。イングランドにおける、フィン王の物語の内容の変更は、例えば、古期英語詩の『フィンズブルフの戦』と、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」を比較対照することによって、明らかになるであろう。次に、その比較対照を試みることにしたい。

『フィンズブルフの戦』は、デネとフレーザンの戦いについての詩で、完全な形で伝えられているわけではないが、残された写本の部分的記述からも、その内容を窺い知ることができる。『フィンズブルフの戦』が表わしている世界は、デネとフレーザンの戦い、特にデネの側における戦いの直前の描写である。デネの側から描かれているとは言え、デネとフレーザンの間の、古くからの宿怨が言及され、双方の側のその宿怨が、戦いの原因であることが示唆されている。つまり、戦いの原因は潜在的に既に以前から存在していて、それが何らかのきっかけにより表面化したと思わせるような描写になっている。一方、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」は、同じように、そのデネとフレーザンの戦いについて述べられているのであるが、そこでは、デネの正義が前面に押し出され、また戦いを引き起こしたのがジュートであるとされ、悪者としてのジュートが強調されている<sup>(18)</sup>。『フィンズブルフの戦』は、少なくとも今日伝えられている部分的記述からすれば、デネの側からの描写になっているとしても、必ずしもデネの側の正義が強調されているわけではない。また、そこでは、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」で、戦いを生じさせたとして悪の役割を付与されているジュートは、言及されていない。今日伝えられていない部分には、ジュートについての言及が、おそらくあったであろう。しかしながら、たとえそうであったとしても、その今日伝えられていない部分には、悪者としてのジュートについての記述は、なかったものと推測される。今日残っている写本は、デネとフレーザンの戦いそのものが主題となっていて、またその主題が全編を通じての主題と推測され、その戦いにおけるジュートの負の役割という事柄とは無縁のように思われるからである。言葉を換えれば、フィン王についての物語は、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」との間に相違点が存在し、それが、クレーバーの言う『ベーオウルフ』の

Danification とある程度関係していると思われる。

もっとも、クレーバー自身が指摘している Danification は、精確に定義づけられているわけではない。クレーバーが、フィン王に関する物語がイングランドに伝えられた時に、大幅な改変があったとし、それを Danification と呼ぶ場合、それはフィン王に関する物語についてであり、古期英語の『フィンズブルフの戦』と、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」のいずれにもあてはまる共通の改変について言及しているようにも思われるからである。そういう意味では、古期英語詩の『フィンズブルフの戦』も、もともとのフィン王についての物語からの改変があったのであろう。もともとの物語は、フィン王についての物語であり、それが北海沿岸の諸部族国家で創られたのであれば、それがデネの側ではなくフレーザンの側から描かれた可能性もある。その物語をフレーザンの側からではなく、デネの側から描くことにしたとすれば、それも一つの Danification であると言えるであろう。『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」では、さらにジュートの負の役割を付与し、デネの側の完全な正義を強調している。それは、もう一つの Danification と言えるであろう。その第二次の Danification の意味については、『ベオウルフ』の成立そのものと関係しているが、それについては、稿を改めて論じたいと思う。ここでは、その二つの改変を通して、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」では、デネの側の観点と、その正義の強調がなされていることを確認したい。

とりわけ『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」において、デネの正義と、悪者のジュートが強調されているのは、そこに、『ベオウルフ』の作者の観点が反映されていると言うことが出来る。つまり、『ベオウルフ』においてはデネが正義でなければならなかったのであり、そのためには、あえてジュートに悪の存在を付与させしたのである<sup>(19)</sup>。

ところで『ベオウルフ』は、古期英語最古の詩『ウィードシース』と部分的に内容が重なる、中世初期ゲルマン人諸国家に関係する物語である。おそらく『ベオウルフ』の作者は、『ウィードシース』の作者と共通のゲルマン人の世界像を持ち、またそのイングランド成立についての知識も、『ウィードシース』の作者と共通するものがあつたであろう。しかしながら、その一方で、『ベオウルフ』には、アングロ・サクソンについて、『ウィードシース』には

## 52 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

見出されない相違点が存在する。それが、クレーバーの言う Danification とも関係して来るであろう。『ベオウルフ』の著者は、「フィン王の挿話」を通して、『ベオウルフ』に Danification の要素を付したとも言える。Danification が、なぜアングロ・サクソンについての記述に関係してくるのかについて、『ベオウルフ』と『ウィードシース』の双方のアングロ・サクソンの記述を比較対照して考えることにしたい。

## 4.

まず、『ウィードシース』と『ベオウルフ』に描かれた世界の共通点であるが、『ウィードシース』に登場するゲルマン人国家は次のようなものである<sup>(20)</sup>。

アングル、サクソン、ユーターン（ジュート）、フリージア、フランク、ヘトワレ（カスアーリイー）、ブルグンド、テューリンゲン、ウェアリーニー、スエービー、ルギーイー、ヴァンダル、ランゴバルト、ゴート（東ゴート）、イエフサス（ゲピート）、デネ（デーン）、スウェーオン（スウェーデン）、イエーアタス（ゲアーアタス）、ミュルギンガス、ウエルヴィンガス、ブロンディンガス、ヘアゾベアルダン、スイッジャン、等。

『ウィードシース』は、古期英語最古の詩の一つと考えられていて、ミュルギンガスという国のウィードシースという名前の詩人が、ゲルマン人諸国家を中心に、様々な国家を訪問し、国王に会うという内容の詩である。4世紀の後半から6世紀の後半までのおよそ200にわたるゲルマン人の諸部族国家が言及され、ゲルマン民族大移動の頃からのゴート（東ゴート）、ブルグンド、テューリンゲン、ヴァンダル、ランゴバルト、そして後に西欧を統一するフランク、さらに、ブリテン島に移住する以前のアングル、サクソン、ジュート、フリージアン、等、種々のゲルマン人部族国家が記述されている。

『ベオウルフ』に言及されているゲルマン人国家もしくは部族は、前に触れたが、デネとイエーアタスを含めると、次のような国家あるいは部族である。

デネ、イェーアタス（ゲーアタス）、フレーザン（フリージア）、エーオタン（ジュート）、フランカン（フランク）、フーガス（フランクの一派）、ヘトワレ（カスアーリイー）、イフサス（ゲピート）、スウェーオン（スウェーデン）、ヴァンダル）、ウエルヴィンガス、ブロンディンガス、ヘアゾベアルダン、等。

『ベオウルフ』には、『ウィードシース』よりも登場するゲルマン人部族国家の数は少ないが、『ベオウルフ』は、6世紀の前半の北ヨーロッパのゲルマン人諸部族国家に限定されているので、『ベオウルフ』に言及されているゲルマン人の数が少ないのは当然とも言える。

『ウィードシース』と『ベオウルフ』のいずれにも登場するゲルマン人部族国家は、次のようになる。

デネ（デー）、イェーアタス、フランク、フリージアン、ジュート（ユイータン、エーオタン）、ゲピート（イェフサス、イフサス）、ヘトワレ（カスアーリイー）、スウェーオン（スウェーデン）、ウエルヴィンガス、ブロンディンガス、ヘアゾベルダン、等。

一方、『ウィードシース』に登場していて『ベオウルフ』に登場しないゲルマン人部族国家は次のような国家である。

アングル、サクソン、ブルグンド、テューリンゲン、ワリーニー、ルギイー、スエービー、ランゴバルト、ゴート、ミュルギンガス、等。

『ウィードシース』には、アングル、サクソンが言及され、そこにジュートも併記されていて、またジュートは特に悪者としての記述はなされていない。

『ベオウルフ』には、アングルもサクソンも言及されていないが、アングルという名称は登場していないとは言え、『ベオウルフ』の中に、まだブリテン島に渡る前の、ユトランド半島に居住していた時期のアングルに関する挿話がある。前に触れたが、オッフア王のアングル王国の挿話であり、それは西

## 54 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

暦4世紀後半と考えられている。『ウィードシース』には、ブリテン島に渡る直前と思われるアングル、サクソン、ジュートが言及されているが、それはユトランドではなく、ライン川近くの地域を想起させる記述である。一方で、『ウィードシース』には、ユトランド半島時代のオッフア王のアングルの王国についての言及がある。それが、『ベーオウルフ』のオッフア王のアングル王国の挿話と重なる。

『ベーオウルフ』の場合は、アングルはオッフア王の挿話の中のみ登場している。『ベーオウルフ』の時代は、オッフア王のアングル王国の150年ほど後の、西暦6世紀前半である。アングルは、『ベーオウルフ』の時代には、ユトランド半島からブリテン島に移住しているか、あるいは、テューリンゲン王国に参加している。従って、6世紀の北ヨーロッパの物語である『ベーオウルフ』に、アングルが登場していないのは、特に不自然であるわけではない。

サクソンに関しては、『ウィードシース』には、ブリテン島に渡る直前の時期と思われる言及があるが、『ベーオウルフ』には、挿話も含め、全く言及されていない。

ジュートに関しては、やはり、『ウィードシース』に、ブリテン島に渡る直前の時期と思われる言及が見出される。そして、『ベーオウルフ』には、「フィン王の挿話」にジュートについて、詳しい記述が見出される。そしてそれは、ジュートの負の役割によって特徴づけられる記述になっている。

『ベーオウルフ』の時代は、6世紀の前半であり、既に、アングル、サクソン、そしてジュートとフリージアンの一部は、北ヨーロッパからブリテン島に移住している。従って『ベーオウルフ』は、『ウィードシース』によって描かれた北ヨーロッパの150年ほど後の世界とも言える。確かに6世紀の前半の北ヨーロッパに存在していたのは、デネ、イェーアタス、フランク、フリージア、スウェーオンといった国家であり、そこには、アングル、そしてジュートはいなかった。しかしサクソンは存在していたはずである。それ故、『ベーオウルフ』における、アングル、サクソン、ジュートについては、『ウィードシース』と比して、時代の事実とは異なる別の観点が見出されるように思われるのである。

## 5.

結局『ベーオウルフ』において、アングロ・サクソン人が言及されていないのは、どのような理由からであろうか。

アングルについては、「オッフア王の挿話」においてユトランド時代のアングル王国についての言及はあるが、アングルという言葉は用いられていない。また、サクソンについては、名前も実体も全く触れられていない。イングランドを形成したゲルマン人諸部族の中で、『ベーオウルフ』にはっきりとその名前が記されているのは、フレーザンとジュートである。フレーザンは、古くからデネと敵対する国家であり、またジュートも、フレーザンの同盟国であり、やはりデネと対立していた。『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」では、デネとフレーザンの戦いが、ジュートに原因があるとし、ジュートに悪の役割を付与している。

『ベーオウルフ』がデーン人とアングロ・サクソン人の融和が目的であるのであれば、あらかじめアングロ・サクソンを悪者にするという発想はなかったはずである。『ベーオウルフ』、とりわけ「フィン王の挿話」において、デネの正義が強調されているが、そのためには、デネの相手国は悪の役割を付与されざるを得なかった。具体的には、フレーザンと、フレーザンの同盟国ジュートである。サクソンも、実はデネと敵対した国家であったと思われるが、『ベーオウルフ』については、サクソンは一言も触れられていない。また、アングルについても、ある時期まで、おそらくデネと敵対していたと思われるが、『ベーオウルフ』に、アングルは触れられていない。そして、イングランドの形成に参画したと思われる、あと二つの部族国家フレーザンとジュートのみが、敵国として明記され、そして、とりわけジュートには、悪の役割が付与されているのである。ジュートは、デネを誉め称えるために悪の役割を付与され、言わば犠牲にされたのである。

アングルとサクソンが、『ベーオウルフ』に描かれていないということは、それがデネに対する敵国ではないということの強調の現われと言うことが出来る。全くアングルとサクソンの名前が見出されないということそのものが、英雄ベーオウルフの時代ではなく、『ベーオウルフ』という詩の創られた時期におけるデネとアングロ・サクソンの共通の世界像になっているのである。『ベー

オウルフ』の物語においては、必ずしもデネのみが正義とされているのではない。『ベアオウルフ』の「フィン王の挿話」では、デネの正義が強調されているが、実は『ベアオウルフ』の前半の物語では、デネはまさに危機に瀕している状態である。そのような危機の状況を生じさせたのは、怪獣グレンデル母子であるが、実は、危機の本当の原因は、怪獣にあるのではない。デネの国家そのもの、具体的には、国王の統治の優柔不断さ、軍人の士気の欠如、奢侈な生活等、国力の弱体化にその原因があるのである。友邦国イエアタスに救済を求めたのも、デネにはその危機を克服し得る人物がいなかった証拠であり、『ベアオウルフ』の「フィン王の挿話」でデネの正義を強調するのも、デネの英雄 Hengest の英雄性の強調が本当の目的である。つまり凱旋して来たイエアタスの英雄ベアオウルフに対して、デネの国王フロースガールは、実はデネにも、かつてベアオウルフと同じような素晴らしい英雄 Hengest がいたということを強調したかったのである。

ところが、おそらく Hengest は、その後ブリテン島に渡ってケント王国を造ったジュートの代表である。「フィン王の挿話」で、Hengest を英雄として強調しようとすれば、Hengest は、ジュートの英雄であるので、ジュートを誉め称えることになる。しかしながら、「フィン王の挿話」では、デネが正義でなければならず、その敵国のフレイザンとジュートは悪でなければならない。そして、戦いの直接的原因がジュートであるならば、ジュートにその悪を付与しなければならない。しかしながら、Hengest は、デネの側の将軍であるとしても、実際にはジュートである。そうであれば、Hengest がジュートであることは、あくまで伏せなければならない。Hengest は、ジュートではなく、あくまでデネでなければならないのである。

かくして、Hengest は、ジュートであるにもかかわらず、それを明示されず、あくまでデネの英雄として登場する。デネの側にもジュートがいて、そのジュートの代表が Hengest であるということは、決して述べられない。『ベアオウルフ』の「フィン王の挿話」にしばしば見られる曖昧さ、不透明さは、そのような作者の意図に起因していると言うことが出来る<sup>(21)</sup>。

『ベアオウルフ』にアングルとサクソンが、全く触れられていないのは、上に述べたように、デネを誉め称えるための、そしてアングロ・サクソンを悪の

存在たらしめないための、『ベオウルフ』の作者の周到な配慮であると言えるが、もう一方では、『ベオウルフ』の作者が、デネの友邦国イエーアタスに、イングランドを重ね合わせているとも考えられる。アングロ・サクソンについて全く言及せず、デネとその友邦国イエーアタスの共存共栄について述べる時に、デネの友邦国イエーアタスが、あたかもイングランドと重ね合わせの存在であるかのような印象を与えている可能性があるのである。その場合、少しでも、『ベオウルフ』の中で、イエーアタスとは別個のアングルやサクソンが登場してはならない。イエーアタスとは別個にアングルやサクソンが登場したのであれば、その二重写しあるいは錯覚は、たちどころに消えて、その仮構は成立しなくなってしまうからである。

しかしながらその場合、『ベオウルフ』の作者は、決してイエーアタスを理想の国家としていたわけではない。イエーアタスの国王ヒエラークは、その遠征途上で、フランクとフレーザンの連合軍との戦いで敗死し、また、後半の物語で、ヒエラークの甥で後に国王となったベオウルフは、ベオウルフ自身ではなく、おそらくイエーアタスの国家自体に非があって、その非を背負う形で龍と戦い、斃れるからである。つまり、結局、デネもイエーアタスも、ある意味で同じような境遇にあるように描かれているのである。そしてもう一つ興味深いのは、『ベオウルフ』の冒頭の記述である。それは、デネの国王の葬送についての記述であるが、その前にデネの由来が記されている。デネは偉大な国王たちを戴く燦然たる歴史を持つ国家であるが、その起源は、身元が不確かな流浪の存在であったということである。その移ろう姿はまたブリテン島に渡って来たアングロ・サクソンの存在とも二重写しになっている。しかしながら、『ベオウルフ』の実際の物語においては、渡って来たのはデネではなくベオウルフである。つまり『ベオウルフ』では、渡って来た存在としてのデネとベオウルフ、そしてアングロ・サクソンが、同じような境遇を持つ重ね合わせの存在として描かれているのである。それが、『ベオウルフ』の作者の意図したところであり、配慮であった。『ベオウルフ』で、アングロ・サクソンについての言及がないのは、そのような重層的な意味を含んでいると考えられるのである。

## [注]

- (1) *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed. Fr. Klaeber, 3<sup>rd</sup> ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950. 本稿では、Klaeber クレーバー版をもとに論じている。
- (2) 通説の8世紀前半は、チェインバーズ、クレーバー等、10世紀前半は、ナイルズ、リーク等によって主張されている。また、ギルヴァンによる7世紀後半説、キアナンによる11世紀前半説、等がある。筆者は10世紀前半成立説を支持したい。拙稿「古期英語詩『ベオウルフ』の成立時期について」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第7号、2010年、を参照。
- (3) イェアタスについて、チェインバーズ、クレーバーは実在の国家であるとし、ナイルズ、リークは架空の国家であるとしている。筆者は実在の国家であると考え。拙稿、ベータ『英国教会史』のアルフレッド古期英語訳および『ベオウルフ』における Geatas について——J. A. Leake の見解を中心に(3)」、日本英語文化学会『異文化の諸相』第28号、2008年、を参照。
- (4) Gregorius de Tours, *Gregori Episcopi Turonensis historiarum libri X*, in *MGH, SS rerum Merov.*, Tom. 1, ed. Wilhelm Arndt, Hannover, 1885. 邦訳：『トゥールのグレゴリウス 歴史十卷(フランク史) I』、兼岩正夫、臺幸夫訳註、東海大学出版会、1975年。

トゥールのグレゴリウスは、ヒエラークをコキライクスという名前で言及し、またそのコキライクスを Dani の国王としている。Dani はラテン語であるが、古期英語では Dene で、デンマークあるいはデーン人のことである。リークは、ヒエラークをトゥールのグレゴリウスが Dani の国王としているので、ヒエラークはデネの国王であり、イェアタスの国王ではなく、従って、イェアタスは『ベオウルフ』の物語を成立するために考案された架空の国家であるとする (Leake, J. A., *The Geats in Beowulf*, Madison, Milwaukee and London, the Univ. of Wisconsin Press, 1967)。ただ、イェアタスは、古期英語最古の詩『ウィードシース』にも触れられている実在の国家であり、ヒエラークはその国王であったと考えられる。リークは、フランク王国のトゥールのグレゴリウスは、領土を接している Dani について、深い知識を持っていなかったはずはなく、トゥールのグレゴリウスがヒエラークをデネの国王としている以上、ヒ

イエラークはイエーアタスの国王ではなかったと述べる。ただ、トゥールのグレゴリウスが、デネとその友邦国家イエーアタスを同じ表現で記述していたとも考えられる。ちょうど『アングロ・サクソン年代記』において、北方からの侵入者すなわちヴァイキングを、すべて Dene デーン人と総称していたのと似ている。実際にはブリテン島へ侵入した北方のヴァイキングは、デンマーク人とノルウェー人であった。それがアングロ・サクソン人には、Dene デーン人と呼ばれていたのである。

- (5) 拙稿「『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について」、『異文化の諸相』第31号、日本英語文化学会、2011年。
- (6) 『ベーオウルフ』には、Wendlas という国家についての言及があり、タキトウスの『ゲルマーニア』のヴァンダルと同定され得るが、クレーバーは、否定的である。Klaeber, *op. cit.*, p. x x x .
- (7) 拙稿「『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest とジュート」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第9号、2012年、を参照。
- (8) 例えば、ケント王国国王エゼルベルトの王妃は、フランク王国の王女ベルタである。597年に、ローマ法王グレゴリウス I 世が、聖アウグスティヌスを中心とした修道士をブリテン島に派遣し、イングランドにおける、ローマン・カトリックの布教を開始した時に、ケント王国の王妃ベルタの多大な尽力があった。すでにフランク王国にいた時からキリスト教徒になっていたベルタは、異教のゲルマンの神々を信奉していたエゼルベルトに対して、キリスト教への改宗を積極的に勧めたのである。その間の経緯は、ベータの『英国民教会史』に詳しい。Beda (Bede). *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed., Ch. Plummer, Oxford, 1956. 邦訳：長友栄三郎訳、『イギリス教会史』、創文社、1971年。第1巻、第25章。
- (9) Tacitus (Publius Cornelius Tacitus), *Germania. Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938, I - 40.
- (10) Ptolemaius: Klaudios Ptolemaios, *Claudii Ptolemaei Geographia*, ed. Karl Müller and C. T. Fischer, 2 parts, Paris, 1883-1901, X I, 6 - 11. 邦訳：織田武雄監修、中務哲郎訳、『プトレマイオス地理学』、東海大学出版会、

1986年。

- (11) *Lex Anglorum et Werinorum hoc est Thuringorum in Germanenrechte, Text und Übersetzungen, Band 2 Die Gesetze des Karolingerreiches, III Sachsen, Thuringer, Chamaven und Friesen*, Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger, Weimar, 1934, pp.36-47.
- (12) Ptolemaius, *op. cit.*, X I, 6-11.
- (13) Bostock, J. K., *A Handbook of Old High German Literature*, 2<sup>nd</sup> edition, revised by K. C. King and D. R. McLintock, Oxford University Press, 1976.
- (14) 例えば、9世紀に古期サクソン語で書かれた文献の、古期英語の *Genesis* への影響が指摘され得る。相互の友好的な関係がなければ、そのような影響関係は生じ得なかったと考えられるからである。
- (15) 拙稿「『ベオウルフ』における Ingwine について」、『キャリアデザイン学部紀要』、第8号、2011年、を参照。
- (16) ヘアゾベアルダンについては、ランゴバルトであるとする説があるが、厨川氏は、その説を否定している。『厨川文夫著作集 下』、金星堂、1978年、250頁。Cf. Klaeber, *op. cit.*, p. x x ix . クレーバーは、ヘアゾベアルダンについての説を、(1) ランゴバルト、(2) ヘルレーリー、(3) 様々な折衷説、(4) 『ウィードシース』のミュルギングスと関連づける説、に分けているが、結局のところ結論づけるのはほとんど不可能であるとしている。
- (17) Klaeber, *op. cit.*, p.235.
- (18) 拙稿「『フィンズブルフの戦』と『ベオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest とジュート」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第9号、2012年。
- (19) 拙稿「『ベオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について」、『異文化の諸相』第31号、日本英語文化学会、2011年、を参照。
- (20) *Widsith in Exeter Book*, ed. Krapp and Dobbie, Columbia University Press, 1936.
- (21) Cf. Chambers, R. W., *Beowulf— an Introduction to the Study of the Poem*, edited and supplemented by C. L. Wrenn, 3<sup>rd</sup> ed., Cambridge University Press, 1959, pp.250-252 ; Tolkien, J. R. R., *Finn and Hengest*, ed. A. Bliss, HarperCollinsPublishers, London, 2006, pp.100-101.

---

## ABSTRACT

### **The Anglo-Saxons in *Beowulf***

Michio IWAYA

---

*Beowulf* written in Old English is one of the oldest poems in western Europe. The story is set in the 6<sup>th</sup> century when the Dene and the Geatas dominated the northern Europe. Though various Germanic tribes are mentioned in *Beowulf*, the Angles and the Saxons, who played an important role in establishing England, cannot be found there. The Jutes and the Frisians, who were also the main Germanic tribes in Britain, are clearly referred to, especially in *the Finn Episode*, though with bad roles. According to Fr. Klaeber, one of the most excellent editors of *Beowulf*, *the Finn Episode* had experienced several alterations after it was introduced into England, and those alterations can be said the “Danification”, because the Danish element was quite emphasized in Old English version. True *the Finn Episode* is narrated from the Danish viewpoint, and *Beowulf* itself is about the Dene and their neighboring Geatas, so it seems natural that the Anglo-Saxons are not referred to in them. But is it the real reason why the Anglo-Saxons are not mentioned in *Beowulf*? Does the “Danification” only mean the change of viewpoint to the Danish side? This paper seeks to solve those questions. Finally it is to be insisted that the Geatas are the reflective existence of the Anglo-Saxons, and it is the real reason why the Anglo-Saxons are not mentioned in *Beowulf*.